

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：34310

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13305

研究課題名（和文）会話分析により記述された暗黙知を英語教師が利用する方法の開発

研究課題名（英文）Developing a method for English teachers to use tacit knowledge illustrated by conversation analysis

研究代表者

石野 未架（Mika, Ishino）

同志社大学・グローバル地域文化学部・准教授

研究者番号：20822836

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は会話分析による知見を教師が応用できるための方法を開発することであった。主な成果は会話分析によって記述した手続き的知識を教師の実践に必要な知識に簡略化する規則を開発したこと、そして簡略化した知識を教師が使用できるようなプログラムを開発したことである。前者の最大の成果は、2023年2月に和文書籍として刊行している。後者の課題は1によって簡略化した知識を教師が実際に利用できるようにするための研修プログラムのは当初の研究計画から遅れながらも教職養成課程のプログラムとして開発を進めており、当該分野の世界的権威であるスウェーデンのOlcay Sert氏との国際共同研究に発展している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は既存の教室会話分析研究の知見を教師の実践の視点からさらに発展させた点である。特筆すべき点は2020年度に本研究課題の一部として発表した教育社会科学研究の学術論文である。当該論文は2022年度に学会賞を受賞した点から教育分野で反響をよび、教師の権力性と会話分析の研究知見について議論の土台を設けることができたと考えている。社会的意義は、それらの知見を教員養成プログラムに還元する手法を開発した点である。社会的意義について特筆すべき点は、会話分析による知見を簡略化する手法についてまとめた和文書籍である。この書籍は教員養成課程でも使用されており、実践者にも還元できる知見である。

研究成果の概要（英文）：The research project was to develop a method for teachers to apply the findings of conversation analysis. The main results were the development of rules for simplifying the procedural knowledge described by conversation analysis into the knowledge needed for teachers' practice and the development of a program to enable teachers to use the simplified knowledge. The greatest results of the former have been published as a Japanese book in February 2023. The latter issue, the training program to enable teachers to actually use the knowledge simplified by 1, is being developed as a teacher training program, albeit late from the original research plan, and is being developed into an international joint research project with Olcay Sert of Sweden, a world authority in this field. The program has developed into an international joint research project with Dr.Olcay Sert of Sweden, a world authority in the field.

研究分野：応用会話分析

キーワード：応用会話分析 会話分析 教師教育 教室インタラクション エスノメソドロジー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究は会話分析による知見を英語教師が利用するための方法を開発する応用研究である。近年、会話分析を英語の授業研究に応用する研究が広がりつつあるが、その成果の英語教師へ還元は未だに不十分である。この問題の背景に、会話分析の知見が会話分析の訓練を受けていない英語教師には分かりにくく、利用しにくいという点が挙げられる。これまでの背景を図示すると、図1のようにまとめられる。

そこで、本研究では次の2つの課題に取り組むことでこの問題の解決を目指した。課題1) 会話分析によって記述した知見を教師の実践に必要な知識に簡略化する規則の開発。課題2) 教師が簡略化した知識を利用するための研修プログラムの開発。これらの開発によって、会話分析の知見を英語教師に還元することを目指した。

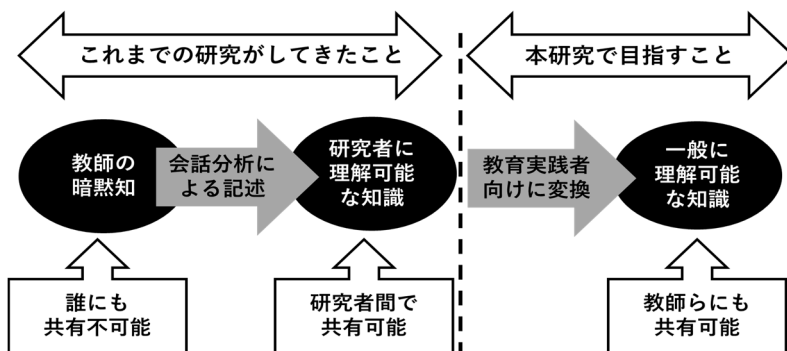


図1. 本研究の背景

2. 研究の目的

本研究の目的は、研究者が保有している会話分析による知見を、英語教師と共有できる知識に変換し、実際に利用できるようにするための研修プログラムを開発することであった。この目的を達成するために、次の1)と2)の小研究課題を設定する。

- 1) 会話分析によって記述した知見を教師の実践に必要な知識に簡略化する規則の開発。
- 2) 課題1)によって簡略化した知識を教師が実際に利用できるようにするための研修プログラムの開発。

会話分析により記述されるのは現象の詳細な記述であり、研究者にとっては重要な情報であっても、教師が実践に応用するうえでは不要となる情報が多く含まれている。課題1)では、研究用に記述された知識から、実践に必要な知識のみを抽出する規則を開発する。課題2)では、課題1)によって開発された規則を用いて変換した知識をもとに、教師がその知識を使えるようにするための研修プログラムを開発する。

3. 研究の方法

本研究では、当初3年の計画であったが、5年にかけて会話分析による知見を英語教師が利用可能な知識にするための研修プログラムを開発してきた。主に用いた方法は会話分析によるデータの分析と、研究対象である中等教育現場におけるフィールドワークである。

まず、課題1)の「会話分析によって記述した知見を教師の実践に必要な知識に簡略化する規則の開発」については、会話分析による知見に関する教師への聞き取り調査を行い、研究による知見と実践者の認識の差異を明確にした。課題2)「簡略化した知識を教師が実際に利用できるようにするための教員研修プログラムの開発」では、課題1)によって変換された知識を用いて実際の教員研修でロールプレイを導入し、教師らの理解度を確認することで手続き的知識の獲得に最適なロールプレイの設定条件を明らかにした。

1点付記しておきたいのは、これらの研究手法が当初の計画より大幅に変更して来た点である。この理由は、研究開始初年度(2019年度4月~2019年度7月)に研究者が産休・育休を取得したことが1点。そしてその後、2019年度後半から2022年度にかけて起きた世界的な感染症流行の影響により、研究収集現場からの協力が得られなくなった点である。この背景からデータ収集や聞き取り調査は大幅に規模を縮小し、計画計画を遅らせるなどして対応した。加えて、そのような状況でも研究協力を得られる対象に変更するなどの対応をして研究活動を遂行してきた。

4. 研究成果

<2019年度～2020年度の研究結果>

産休・育休により研究中断の期間があったため、2年分をまとめて記載する。当該年度では、会話分析により記述された実践知を示されたとき、現場の教師がどのような情報を必要と考えるのかを把握することを目的に面接調査を行い、収集したデータ情報を類型化する作業を行った。これらの研究活動のうち課題1)で整理した知見とデータの比較から新たな教師の実践知を得た。それは、次のaとbである。a) 学校英語教育におけるティームティーチング授業で外国人指導助手の役割を活かす技法として評価行為を委ねるという行為があること。b) 教室のIRE連鎖において教師の負担を軽減する1部分の構築方法があるということ。以上の分析結果に関連した研究成果はそれぞれ論文にまとめて学術誌に投稿した。また、これらの成果のうちスピノフとして教師の権力性にかかわる会話分析的な検討を行ったが、この成果については学術誌に掲載され、2022年度に学会賞を受賞した(石野, 2020)。

<2021年度の研究結果>

上記の研究により会話分析で記述した手続き的知識に適応する教師用の簡略化規則を作成し、書籍化のための準備をすすめた。この段階で社会的還元を狙って、英語教育実務家が主に読者となっている大修館書店の雑誌「英語教育」に萌芽的な研究成果を一般教員向けにまとめて公開した(石野, 2021)。加えて、2020年度に投稿していた学術論文がそれぞれ1件国際誌および国内誌に掲載された(e.g., Ishino, 2021)。

<2022年度の研究結果>

これまで記述してきた知見を踏まえて課題2)に取り組むべく、簡略化した知見を利用するロールプレイを導入した研修プログラムを各研究協力校にて実施した。ここで録画した研修データと回収した質問紙調査のデータを他の会話分析研究者と共有し、助言を得ながら教育プログラムの精緻化を行った。これらを書籍にまとめたものを2022年度末(2023年2月)に多賀出版株式会社から学術書として刊行した(石野, 2023)。刊行した書籍はこれまでの研究に協力得た現場の教師たちにも配布し、それぞれの実践で使用してもらっている。

<2023年度の研究結果>

上述の研究成果をふまえて課題2)であった教師が使用できるプログラムの開発について取り組み、いくつかの成果をあげることができた。成果の発表には主にこれまでパイロットスタディとして収集したデータをまとめ、共同研究として国際シンポジウムで発表し、国内学会でも発表した(Ishino & Takahashi, 2023; 石野・高橋, 2023)。これらの成果をまとめるにあたり、コロンビア大学のティーチャーズカレッジにて教育学博士をもつ高橋純子氏を共同研究者として招き、データの解釈が恣意的にならないよう客観性を担保した。この成果は2024年度に国際学術出版社から刊行される書籍の1章として公開される予定であり、現在刊行準備中である。

引用した研究成果

- Ishino, M., & Takahashi, J. (2024). Training “Task Preliminaries”: A Case of Collaborative Interventions in a Japanese Teacher Education Context, In Waring, H., & Sert, O (Eds), *Conversation Analysis and Language Teacher Education: Intervention Studies*. Edinburgh University Press. (in printing)
- Ishino, M., & Takahashi, J. (2023). Implementing CA Interventions to Enhance Pre-Service English Teachers’ Task Introduction Skills, *Proceedings of the Sixth Annual CAN Asia Symposium on L2 Talk*, pp.21 – 26.
- Ishino, M., & Takahashi, J. (2024).
- 石野未架・高橋純子 (2023) 「介入会話分析による教職志望学生の授業改善」『日本教育工学会 2023 年春季全国大会講演論文集』 163-164.
- 石野未架. (2023) 『教師の相互行為能力は記述可能か 英語授業の会話分析による試み』多賀出版株式会社.
- Ishino, M. (2021). Teachers’ Embodied Mitigation Against Allocating Turns to Unwilling Students, *Classroom discourse*, 13(4), 343 – 364
- 石野未架 (2021) 「会話分析を用いた授業リフレクション (ふりかえり)」『英語教育』, 70(2), 64 - 65, 2021 年 04 月,
- 石野未架 (2020) 「教室のなかの教師の「権力性」再考 : IRE 連鎖における正当的権威の維持」『教育社会学研究』, 107, 69 – 88.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Ishino Mika	4. 巻 71
2. 論文標題 Request for permission to Switch to L1: Treatment for unlocatable problems in English medium of instruction classrooms	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Linguistics and Education	6. 最初と最後の頁 101074 ~ 101074
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.linged.2022.101074	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ishino Mika	4. 巻 -
2. 論文標題 Inclusive third-turn repeats: managing or constraining students' epistemic status?	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Classroom Discourse	6. 最初と最後の頁 1 ~ 28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/19463014.2023.2190033	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石野未架・高橋純子	4. 巻 -
2. 論文標題 介入会話分析による教職志望学生の授業改善	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本教育工学会2023年春季全国大会講演論文集	6. 最初と最後の頁 163 ~ 164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石野未架	4. 巻 43
2. 論文標題 外国人指導助手(ALT)の教師的役割を形成する英語教師の振る舞い-中学校のティームティーチング授業を対象とした会話分析研究-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JALT Journal	6. 最初と最後の頁 61-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mika Ishino	4. 巻 13
2. 論文標題 Teachers' Embodied Mitigation Against Allocating Turns to Unwilling Students	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Classroom Discourse	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/19463014.2021.1918194	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石野未架	4. 巻 2021
2. 論文標題 教師の謝罪と権威の維持	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト2020 応用会話分析研究－相互行為的視座からの教育と学習－	6. 最初と最後の頁 16-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石野未架	4. 巻 2022
2. 論文標題 共感の回避にみる外国語指導助手 (ALT) の教育的立ち位置－チームティーチング授業の会話分析から－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 応用会話分析研究2021 会話における情意表現の役割	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石野未架	4. 巻 70
2. 論文標題 会話分析を用いた授業リフレクション (ふりかえり)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 64-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石野未架	4. 巻 107
2. 論文標題 教室のなかの教師の「権力性」再考：IRE連鎖における正当の權威の維持	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育社会学研究	6. 最初と最後の頁 69-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mika ISHINO	4. 巻 -
2. 論文標題 Can I speak in Japanese? ” -Pre-ness for Displaying Advanced Academic Knowledge in EMI Classrooms at a Japanese University	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Proceedings of the Fourth Annual CAN Asia Symposium on L2 Talk	6. 最初と最後の頁 73-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 石野未架	4. 巻 5月号
2. 論文標題 会話分析を用いた授業リフレクションのすすめ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 石野未架	4. 巻 43
2. 論文標題 外国人指導助手（ALT）の教師的役割を形成する英語教師の振る舞い-中学校のチームティーチング授業を対象とした会話分析研究-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JALT Journal	6. 最初と最後の頁 61-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石野未架	4. 巻 -
2. 論文標題 教師の謝罪と権威の維持ー単一事例分析による予備的考察ー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語文化研究科共同プロジェクト2020	6. 最初と最後の頁 16-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mika Ishino	4. 巻 22
2. 論文標題 Foreign Assistant Language Teachers' Identity Formation for Surviving in Japanese School Culture	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Intercultural Communication	6. 最初と最後の頁 73-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石野未架	4. 巻 71
2. 論文標題 教師が一斉授業の中で個人に言及することの会話分析的考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本教育社会学会第71回大会発表要旨集録	6. 最初と最後の頁 244-245
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件(うち招待講演 2件/うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Aya Watanabe, Mika Ishino
2. 発表標題 Doing noticing and collective sense of "strangness" as a preamble to the emergence of teachable and learnable object in language classrooms
3. 学会等名 Interactional Competences and Practices in a Second Language (国際学会)
4. 発表年 2022年~2023年

1. 発表者名 石野未架・高橋純子
2. 発表標題 介入会話分析による教職志望学生の授業改善
3. 学会等名 日本教育工学会2023年春季全国大会
4. 発表年 2022年～2023年

1. 発表者名 Mika Ishino
2. 発表標題 Teachers' Inclusive Third-turn Composition by Gaze-shifting and the Use of the Japanese particle "ne"
3. 学会等名 The 17th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石野未架
2. 発表標題 マルチモーダルな教室相互行為の分析とその課題
3. 学会等名 大阪大学大学院言語文化研究科 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Mika ISHINO
2. 発表標題 Promoting ALTs' Participation in Team Teaching ,
3. 学会等名 The 46th Annual International Conference on Language Teaching and Learning Japan (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石野未架
2. 発表標題 相互行為における言語の役割 言語能力の会話分析的検討
3. 学会等名 第48回大阪市立大学英文学会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Mika ISHINO
2. 発表標題 “Can I speak in Japanese?” -Pre-ness for Displaying Advanced Academic Knowledge in EMI Classrooms at a Japanese University
3. 学会等名 The Fourth Annual CAN Asia Symposium on L2 Talk（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石野未架
2. 発表標題 教師が一斉授業の中で個人に言及することの会話分析的考察
3. 学会等名 日本教育社会学会第71回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 石野未架	4. 発行年 2023年
2. 出版社 多賀出版	5. 総ページ数 134
3. 書名 教師の相互行為能力は記述可能か 英語授業の会話分析による試み	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------